甲第84号証

取り残される人たち

検証マイナ保険証 ③

東京12/25

閉院たまらん

医療機関 マイナ対応できず

しわ寄せは患者に 国はなぜ焦るのか

小さな歯科医院が11月末、患者に惜しまれながら47年余の歴史に幕を閉じた。

その医院は横浜市内の私鉄駅に程近い雑居ビルの2階にある。急な階段を上ると玄関があった。

出迎えた歯科医師(77)は「自分の体が不自由になるまでは続けるつもりだった」と寂しそうに語る。一時は多くの患者を抱え、歯科医師2人に歯科衛生士や技工士まで雇っていた。

国はマイナ保険証への一本化をにらみ、昨年4月から医療機関などに、オンラインで患者の保険資格を確認するシステムの導入を原則義務化した。この歯科医院は、手書きの明細書（レセプト）で診療報酬を請求しており導入が猶予されていたが、もう限界だった。

設備を導入するにも、国からの補助金だけでは賄えない。自身の年齢も考慮すると、歯科医院を続けるのは困難だと判断した。

「よもやマイナ保険証がきっかけで廃業するとは思わなかった。30年以上通ってくれた患者さんのことを考えると残念。国のやり方は理不尽です」

この歯科医師のように、経営者の高齢化に加え、マイナ保険証導入に伴う設備投資に対応できず、廃業する医療機関が相次ぐ。帝国データバンクによると、今年1～10月の歯科医院の倒産・休廃業は126件に上り、過去最多のペースで推移している。

自宅で越智医師の診察を受ける男性㊐＝三重県明和町で

三重県伊勢市で父の代から診療所を営む越智晶俊院長(68)にも、廃業の危機が迫っている。

マイナ保険証に対応したシステムの導入を拒んでいるからだ。マイナ保険証を読み取るカードリーダーもない。越智院長は、マイナ保険証によって患者の医療情報が漏れるリスクを挙げ、「廃業するほうがまし」と言い切る。

システムを導入しないと、保険医療機関の指定を取り消される可能性がある。11月下旬も厚生労働省側からシステム導入を催促する電話があったばかりだ。

20年以上通う鎌田まさ子さん(81)は「細かく話を聞いてくれて説明も丁寧。精神的にも助けられている」と話す。夫婦でかかりつけだという箭野美津枝さん(79)は「命を預けているのに、やめてもらったら困る」と顔を曇らす。

伊勢市の高齢化率は32%超で、全国平均を上回る。診療所のある地域は、子や孫が在宅介護をしている家が多いそうで、訪問診療も欠かせない。

越智院長は「地域の医者は、風邪のようなちょっとした病気まで診る『風邪医者』。新型コロナウイルスのときは朝から夜まで発熱患者を診た」と話す。

「越智医院がなくなるほうが地域には不利益」。コロナ禍に地域医療を支えてくれた医師が、なぜ廃業しなくてはならないのか、患者らは納得できない。

親子2代で世話になってきたという男性(67)は、こう憤る。「システム導入せんから閉めるなんて、たまらん。国はなんでそんなに焦って進めるんか」

患者たちの口ぶりや表情からは、越智院長がどれほど頼りにされているのかが痛いほど伝わってきた。

地方では医師不足に悩む。「より良い医療」のためマイナ保険証を導入するはずが、かえって地域の医療体制を弱めることになっては本末転倒だ。

廃業となれば患者たちに大きな影響が及ぶ。割り切れない思いが残った。

（長久保宏美、戎野文菜）